こころの健康

第　48　号
平成 24 年 10 月
愛知県精神保健福祉協会
（愛知県東大手庁舎）
名古屋市中区三の丸三丁目２番１号
電話（052）962－5377　　内線 550

■ 新会長挨拶 ■

防災としての精神保健・精神医療体制整備：被災地医療支援で感じたこと

名古屋大学 大学院医学系研究科 精神医学・親と子どもの心療学分野　**尾　崎　紀　夫**

先日､私は愛知県精神保健福祉協会（当協会）会長に就任致しました。何かと行き届かない点もあろうかと存じますが、何とぞよろしくお願い申しあげます。

さて、当協会の使命は、愛知県の精神保健・精神医療が如何にあるべきかを考え、具現化することにあります。例えば、昨年の東日本大震災を経験した我が国、特に東海地区は「震災が生じる可能性が高い」とされており、防災意識を持って精神保健・精神医療体制を整備しておくことが重要です。愛知県内の多数の方々が被災地支援活動に参画されましたが、支援活動の経験から防災について考えるべき点も多いのではないでしょうか。今回、この紙面をお借りして、私が、被災地医療支援で感じ、防災としての精神保健・精神医療体制整備について考えておりますことをご紹介したいと思います。

私が在籍しております名古屋大学医学部附属病院は、最初の医療支援チームを昨年３/18 から３/23 まで石巻に派遣致しました。第一陣の一員として､精神科･親と子どもの心療科（当科）の精神科医が加わって以来、今も当科の精神医療支援活動は続いております。治療が中断された精神科患者さんへの治療再導入を主とした初期から、現在、福島県で被災した発達障害児への医療支援と、その内容は変化しております。

私は、当科の精神医療支援活動の方針立案とともに、震災後約半年が経過した昨年の８/ ３から短期間ですが宮城県Ａ市へ赴きました。Ａ市での精神医療支援は、東京大学、千葉大学と名古屋大学の三大学病院の精神科・児童精神科が連携をとり、昨年の３月末から 12 月末まで地元のニーズを確認しながら、実施しておりました。昨年８月頃の状況は、1.被災半年を経て、精神医学的な問題が住民に生じているが、地域の精神医療機関への通所に抵抗があり、保健所で精神医療相談と共に仮設的に実施されていた精神医療を継続的に利用する患者が見られる。２.地元自治体職員は被災後の対応で負荷が高まった状態が続いている。以上を踏まえ、私の果たすべき役割は、地元保健所で地域住民の精神保健相談、自治体職員の産業精神保健相談、の二点でした。

地域住民の精神保健相談を行うと、被災後に生じた悪夢を伴う不眠・不安を紛らわすため飲酒量が増え、その結果、心身の不調が生じているにもかかわらず、医療受診をためらっている方が目立ちました。過量飲酒がもたらす問題点を伝え、医療受診を促しました。しかし、現地のアルコール精神医療の体制が乏しいことを知

り、不安に思ったのは、飲酒の問題が生じている被災者が地元の医療機関を訪れた際、どの様な対応がなされるかです。過量飲酒が引きおこした身体疾患だけが治療対象となり、飲酒行動自体、あるいは過量飲酒に至る心理社会的問題が顧みられなければ、十分な改善は期待できません。「不眠が生じた場合、どの様な行動をとるか」を国際比較したデータによると、「医療機関を訪れることが最も少なく、飲酒する率が最も高いのは日本」とされています。アルコール摂取は多様な身体・精神疾患と密接な関連するにもかかわらず、アルコール問題に対応する我が国の医療・保健体制は、残念ながら十分とは言えず、愛知県とて例外ではありません。

さらに、被災地では児童の精神医学的問題も発生していたのですが、元来、児童精神科医が全くいない地区で、児童精神科医のいる仙台市への公共交通機関の復旧は目途が立っておらず、三大学病院の児童精神医療支援の重要性を改めて確認しました。

また、被災後負荷が高まっている自治体職員の産業精神保健相談を実施すべく、自治体の産業保健体制について地域保健に従事している保健師の方々に確認しました。ところが、職場に配備されているはずの産業医が、すぐには誰かわからない状態で、衛生委員会活動も実施されていないことが判明しました。そこで、自治体の人事労務の方々に、「労働安全衛生法」で規定されている長時間労働者への面談体制や、労働者の個人情報が守られる体制の構築、休務に至る勤労者が出る場合も想定されるため復職支援制度の整備など、自治体の健康管理システムが整備されることが必要であることを伝えました。しかし、現地のマンパワーは不足しており、外部からの人材投入が必須と判断されたため、「地域支え合い態勢づくり事業」などを活用して、産業精神保健の人材をうることを提案致しました。

この提案後、気になったのは、「地域支え合い態勢づくり事業」により予算措置はある程度為されたとしても、産業精神保健スタッフが我が国で十分に育成されておらず、然るべき人材を得ることは、外部からであれ難しいという点です。

以上、被災地の医療支援で感じたことは、「平時の精神保健・医療体制が不十分な場合、たとえ被災後に支援を得たとしても、十全に機能するものではない」という点でした。普段の保健・医療の水準を十分に高めておくことは、愛知県、そして我が国全体の防災上も重要であることを実感した次第です。この点、関係者の方々のご理解とご支援をお願い申しあげる次第です。

■ 平成 24 年度　総会記念講演 ■

「老いの風景　～地域で老いるために～」

講　師：日本福祉大学中央福祉専門学校 専任講師
東濃成年後見センター 理事長　**渡　辺　哲　雄 氏**

渡辺：

郡上八幡で生まれ育った私には、ゲンスケというじいちゃんがいました。明治の男です。印刷屋を開業して、死ぬまでずっとやり続けました。腸が弱いゲンスケの口癖がありました。「わしは腸が弱いでな、長生きはできんぞ。そうは生きんぞ。早よう死ぬぞ」。死ぬ死ぬ、死ぬ死ぬと、言い続けたんです、92 歳まで（笑）。

このゲンスケに妻のフサが仕えていくんです。ストレスが溜まるのですね。ストレス解消法を持っていました。何だと思いますか。プロレスです。いえ、するんじゃないですよ（笑）。

テレビを見るんです。こんなに画面に近づいて、興奮すると非国民、非国民と叫んでいました。いくら太平洋戦争に負けたからって、日本人のアナウンサーがアメリカ人のプロレスラーに「さん」を付けて敬って、日本人を呼び捨てにするのはけしからんと言うのです。ジョナサンというレスラーがいたんですね(笑)。プロレスでストレスを解消しながら、家と畑を往復して、子どもを育てて孫を育てて死んだ人です。我慢強いんですね。証拠があります。畑に行くときは、モンペというのを履いて、着物に割烹着、白い手拭いを頭に巻くんですが、あるとき白い手拭を頭に巻いて畑に出かけて行ったフサが、真っ赤な手拭いを手に巻いて帰ってきたんです。「どうしたの、ばあちゃん」って聞くと「なあに。あんじやない、あんじやない」。案じることはないという意味の方言です。「ちょっと畑で鎌で切ったんじゃ」と言って、赤い手拭いが茶色くなって黒くなるまで家事をする。畑に行く。家族はみんな「あんじやない」と思っていましたが、忘れたころに包帯を解いた彼女の指は曲がりません。見ると、よく手入れした鎌で、草ごと、親指と人差し指の間をザクッと切ったんですね。血が吹き出していたと思いますが、それを包帯代わりに手拭いでしっかりと結わえ付けてくっつけてしまう我慢強さが災いして、晩年は指の曲がらない女でした。

この２人の間には子どもができず、ゲンスケが40を過ぎてから子どもが授かりました。女の子でした。トシコという名前を付けました。大喜びのゲンスケが、すぐにがっかりしたんです。印刷屋の跡取りは男がほしかった。あとは望めませんから孫に期待したんですね。トシコが20歳になるのを待ち構えるようにして、ちょっと知り合った人を婿に取るんです。翌年、待ちに待った孫が誕生するんです。これがまた産婆さんも家族も近所の人も集まって、「なんて可愛い、玉のような、こんな可愛い子は見たことがない」という男の子が誕生しまして、哲雄って名前をつけたんです（笑）ね。だけど皆さん、婿に入った家にゲンスケがいるんですよ。これが、「死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ」。それにフサがひたすら仕えていく。年をとってからの一人娘ですから甘やかされています。トシコは時々私に「哲雄。私たちはね、憎み合ってたわけじゃないよ」と聞かせてくれましたが、私が２歳のときに別れてしまいます。ですから、私は母ちゃん、じいちゃん、ばあちゃんという母子家庭で育ったんです。

当時、私はタバコを吸っていました。食事の時に私が吸った吸い殻が灰皿の上に積もっていくんです。これを何を思ったか、フサが箸で挟み始めましたが、うまく挟めません。失敗して失敗して、ようやく一つ挟んでうれしそうに「これは何のおかずや」って聞いたんです。吸い殻だかおかずが分からないんですね…視力が。だからプロレスをこんな前で観ていたんですね。

思い当たることが一つだけありました。朝、顔を洗うと目を洗っていました。「ばあちゃん、どうしたの」。「なあに、あんじやない」。口癖です。「ちょっと畑でな、クモの巣が目に入った」。クモの巣が張っているところを知らずに通ったら、糸が顔に掛かって目に入ってから見づらい。「哲雄よ。クモの巣ってものは怖ろしいもんやぞ」。私はすっかり信じて、あれからずいぶん長い間、クモの巣に気を付けて気を付けて生活をしましたが、あれはクモの巣じゃなくて白内障だったんです。

私はトシコを連れて、フサを乗せて、郡上八幡から長良川の堤防をずっと下って、岐阜市にある眼科の専門医に連れて行きました。「よくぞここまで…放っておきました(笑)。両眼ほとんどだめですよ。手術しか方法がありませんが、歳が歳ですからね、くっつきますかね」。「切ってやってください」、「見えるようにしてやってください」と言っているのは、切られない２人なんです(笑)。切られない人は簡単に言いますよね、切ってやってくださいって（笑)。フサの目は小さな目でした。「どうやって切るんや？え？目に注射打つんか。わし、しばらく様子を見る」普通は弱音を吐くでしょう。ところが指がぶらぶらになってもくっつけちゃう人ですから、丸

椅子に腰をおろして、唇をへの字に結んで、一言も口を利きません。フッと見たとき、私はサンショウウオかと思いました。手術の当日、一匹のサンショウウオが手術室へ入っていきました。「ばあちゃん、頑張れよ」。背中に声をかけてもサンショウウオは振り向きません。赤い電気が付きました。手術中です。外で私とトシコが待ちました。長いような短いような時間が過ぎました。パッと電気が消えてバタンと扉が開いて、ストレッチャーに乗せられた一匹のサンショウウオが、今度は目をぐるぐる巻きにされて出てきました。まさかそんなに我慢強いとは知らない主治医の先生が、フサの耳元で注意をしました。「いいですか、おばあちゃん。傷口が塞がらないといけませんから、絶対に動いちゃいけませんよ」。サンショウウオですよ。もともと動かない動物です（笑）。そこへ医者から動くなという指令が来たんですから、フサは動きません（笑）。私が見舞いに行って「ばあちゃん、大丈夫？」と聞いても、口を結んだまま返事をしません。可愛い孫に「なあに、あんじやない」って言いたいんですよ。でも言うと口の筋肉が動くでしょ。目の筋肉が近いでしょ。動いたら傷口が塞がらない。フサの心の中は分かります。もう一目、郡上八幡が見たい。もう一目遅くなって生んだトシコに会いたい。そして、もう一目、誰よりも、あの可愛い…（笑）、哲雄に会いたい。その一心で、うっと我慢している。しかし、あんじやない…と言いたい気持ちが募るんですね。思いが募ると人って誰にも教わらずに突然あんな技術を習得するんですね。有名なのは、いっこく堂という人です。知っていますか？腹話術です。手術から四日目ぐらいでしたか、いつものように見舞いに行って、「ばあちゃん大丈夫？」と声をかけたんです。返事は返ってこないと思っていました。ところが唇ひとつ動かさずに、フサがしゃべったんです。「なあに、あんじやない！」。腹話術です。

しかし、唇すら動かさないでじっと寝ているのは大変疲れるんですよ。２時間おきに寝返りを打たせないと褥瘡ができるといいますが、それより先に疲れちゃうんです。ところがフサはじっと耐えたんです。いよいよ包帯を解く日がやってきました。フサが座っている。その前にトシコと私が座りました。その後ろに先生が立っています。フサの後ろから看護師が一巻き一巻き包帯を解いていきます。いよいよフサの目が開くんです。私とトシコが想像しているんです。目が開く。蛍光灯が飛び込む。まぶしくてウッと目を閉じる。おそるおそる目を開ける。スーッとピントが合うというところまで同じ想像をしているんですが、その後がちょっと違うんですね。トシコの想像では、フサの第一声は「トシコ」と言うだろうと思っているんです。だけど、私の想像では「哲雄」と言うだろうと思っている（笑）。皆さん笑いますけど、ここ大事なとこなんですよ。最初に誰の名前を呼ぶかによって、それから先の人間関係が微妙に変わるんですよ（笑）。私には自信がありました。

私は大阪の学校に４年間、下宿して通いました。夏になると郡上八幡に帰るんです。郡上八幡で生まれ育った人間には、長い歴史のどこかで遺伝子に鮭が混じったんじゃないかと思います。夏になると、どこからともなく郡上踊りのお囃子が聞こえてきて、「そうだ、帰ろう」（笑）。郡上八幡でひと月過ごして大阪へ戻る。一週間するとトシコから電話が入るんです。「哲雄、またおばあちゃんがご飯食わんぞ」。分かりますか？私がいなくなったことが切なくて寂しくて、それを口には出しませんが、食事が喉を通らなくなるぐらい、私のことが、好きなんですから（笑）、第一声は「哲雄」と、私は思っていますが、トシコはトシコで、いろんな思いがある。母と子が熱い火花を散らしながらジーッと眺めているところを、看護師が一巻き、一巻き…。最後の一巻き。ゴクッと唾を飲む音が聞こえるぐらいの緊張感の中でフサの目が出て来ましたが、その目を見て私たちは言葉もありませんでした。手術した方の目から、山吹色の目ヤニがダラッと出ていまして、手術は失敗でした。あれほど石仏を寝かしつけたように、身じろぎしないで療養したにもかかわらず、フサの目は

フサがらなかった(笑)。だじゃれを言っている場合じゃないです（笑)。うまくいったらもう一方も切りましょう…ですから、もう一方は放置されて、私が運転して郡上八幡に連れ戻るとき、残念で口がきけません。助手席ではトシコが前方を睨みつけています。ルームミラーをチラッと見ると、後ろの座席に何だか小さくなったフサが浅く腰をおろしています。その膝の上にこれぐらいの物を宝物のように握りしめていました。かけたって見えやしない、白内障用の眼鏡です。あんなものはむだなんですが、眼鏡にすがるようにして、北へ北へ揺られていくときのフサは暗闇です。

皆さん、目が不自由になったときの自分を想像してみてください。ここに来られますか。フサは二度とプロレスを見ることはありませんでした。だけど我慢強い女なんです。悲しい、辛い、残念なんて一言も言わないで黙々と日常生活に取り組みました。郡上八幡はうなぎの寝床と言いまして、道路に面して間口の狭い、奥行きの深い木造二階建てが軒を連ねる城下町なんです。入り口を入ると通路が一本縦に走っていて部屋が横に割ってある。道路に面した部屋は印刷屋です。一つ飛んだこの部屋にフサのベッドを作りました。次は食堂兼居間なんですが、縦長の家は光が入りませんから、次に中庭が作ってあって、さらにちょっとした小屋がある。問題は、ここで寝起きするフサのトイレでした。トイレは家の一番奥まったところに作ってあります。フサはベッドから通路へ降りて、壁伝いにトイレまで用を足しに行くのが大変でした。我慢強い人ですから、弱音を吐かないで、行ったり来たり、上ったり降りたり、行ったり来たり、上ったり降りたり。この辺りはすっかりフサの生活エリアになりました。タンスの何段目に何が入っているか、目が不自由でもちゃんと分かるようになりました。よく食べる、よくしゃべる、よく笑う。明るい日々が戻ってきた２月でした。雪が降ったんです。私の長靴が通路に置いてありました。不用意でした。フサが用を足しにいく途中でそれを踏みました。ゴムですからどうってことないと思うでしょ？ところが、目の不自由な人が得体の知れない物を踏むということは、お化け屋敷でスポンジが仕掛けてあるのと同じです。手探りで、こう…歩いていたら、突然、グニャッ。「なんだ、これは」と片足を上げた。目を閉じている。年をとっている。バランスがとれない。ガクッと膝をついたんです。幸い骨折は免れましたが、痛かったんです。痛い思いをした目の不自由な人は、臆病になります。何か障害物があるのではないかという幻想に怯えて、足がすくんで前に出ないんです。「普通に歩け、ばあちゃん。何にもないから普通に歩け」と言うんですが、「なあに、あんじやない、あんじやない」。トイレに行くまでの時間が３倍かかるようになったんです。そうすると何が起きるか分かりますか？あっと思ったときには着物の前が濡れて、下が水浸しです。水ではありません。頭はぼけていませんから、「こんなところで粗相をした。哲雄に恥ずかしい。ゲンスケにみっともない。トシコに面目ない」。下着を取りに行きたくても、目が不自由だからとっさの動きができない。何かしないではいられなくて、その場で足踏みをすると、ピチャピチャ音がするんです。それが可愛そうで、トシコと哲雄が頭を悩ませました。ベッドは動かせないし、トイレも動かせないし…。

私はトシコを連れて隣町まで行ってポータブルトイレを買いました。8,200 円でした。今は 30,000 円ぐらいしますね。これをケチっちゃだめなんです。ケチると安定性が悪くて、乗り移ろうとしてガタンとこけて骨折して、ほんまも

んの寝たきりになります。だから専門家に見てもらって、どっしりと安定性のいいものを選ばなきゃいけないです。ポータブルトイレをベッドの脇に置きました。便利でした。降りて用を足して上るだけです。トシコとゲンスケは印刷屋でしょ。私は外へ働きにいく。トシコが用を足しにいくときにフサの部屋の前で声を掛けるんです。「ばあちゃん、お茶でものむ？困ったことある？ほしいものある？」。すると判で押したような明治の女の口癖が返ってきます。「なあに、あんじやない」。ところがあるとき、「なあに、あんじやない」という答えに力がこもっていた。びっくりして襖を開けたら、フサはポータブルトイレからベッドに上ろうとする姿勢でもがいているんです。「どうしたの、ばあちゃん」。「なあに、あんじやない！」。何が起きたか分かりますか。ここが大切なところです。行ったり来たり、上ったり降りたり、行ったり来たり、上ったり降りたり…目の不自由なフサの、たった一つのまとまった運動を奪ったんです。一番楽なところにポータブルトイレを置いたために運動量が減って筋力が衰えて、降りたら上れなくなってしまったんです。今だったら失敗する辺りに置きます。フサはこの辺りまで歩いていって戻ってくれば、ベッドの周辺は歩けたかもしれません。ぎりぎり歩いて行けるところに置くのが自立支援です。一番楽なところに置くのを専門用語で何というか知っていますか？「親切」っていうんです（笑）。身内や素人は親切をしてしまいますね。

ポータブルトイレが使えなければ男は尿瓶です。女に尿瓶があるかと思ったら、これがあるんですよね。差込み便器といって、ちりとりみたいなものでした。「取るよ」と言うと、フサは腰を浮かせる。ポータブルに移して始末する。ところが「取るよ」と言っても腰が浮きません。上り下りしなくなったんですから、さらに運動が減って腰を浮かす筋力がだめになったんです。

こうなるとオムツです。オムツをした目の不自由な人が、ここで寝ているんです。完璧な寝たきり老人ができあがりです。朝から晩まで、テレビも新聞も家族の顔も天井も見えない状態で、オムツをして寝てるんです。刺激というものが何一つないでしょ。あ、耳がありますよね。フサの耳は正常でした。ですけど皆さん、耳って我々の体の中で一番いい加減な器官だって知っていますか？脳外科の先生が私に教えてくれました。「渡辺君、耳というのはいい加減な器官だよ」耳からだけの刺激が10分、20分継続して入ってくると、耳はそれを判別しないんです。単なる音として認識して、やがて子守歌になる。「眠れ～眠れ～」。ところが、脳外科の先生が教えてくれるんです。「渡辺君、耳はいい加減だけどね、最後まで残るんだよ」。もう分からなくなっている人に孫やひ孫の声を聞かせると、脳波がピッピッと反応する。「渡辺くん、どんなに分からないと思っていても、聞こえてるから、その人にとって不愉快な話をしちゃいかんよ」。皆さんもお見舞いに行ったときなんか、不用意なことを言っちゃいけませんよ。家族は疲れていますから、「あら、お見舞いに来てくださったんですね。見てやってください。うちの人、もうこんな状態で４年。オリンピック２回目。この状態で誰が可哀想って、この人自身が一番可哀想だわね。もう一日も早くお迎えがきた方がいいと思うんです」。見舞いに行った方は、家族を慰めようとするんですね。「４年ですか、４年！それは辛いわ。私だったら早ようお迎えがきたほうが…」って言っちゃいかんのです。聞こえているんですから。「あのしっかり者がこんなになっちまって…。この人に貸してやった300円も、もう返って来ん」なんて不用意なことを言いますと、きれいなお花畑に向かっているタマシイが「300円！」と言って帰って来ますからね（笑）。あ、ついでですからお花畑のお話しをしましょう。脳外科の先生が話してくれました。聞いておくと役に立ちますよ。最後まで残る耳の細胞の周辺に、不思議な細胞があるんですって。その細胞は人間が生きようとしている間は働かないんです。さあ死ぬというのが引き金になってボウッと働いて、私たちにきれ

いなお花畑を見せてくれるんです。水がある。池がある。人によっては向こうからきれいな人がおいでおいでをする。まれにこっちから親戚が「早く逝け」（笑）。これは冗談ですよ。世界中にはおっちょこちょいがいて、いっぺんきちんと死んだのに戻ってくる人がいるんです。そういう人たちの報告が共通しているんです。きれいなお花畑と、水…。うっとりするような気分。「だからね、渡辺君、私たちの脳には、死ぬ間際には、うっとりするような気分になるようなプログラムがされているんだよ。私はそう思うがね」。私は脳外科の先生を信じました。皆さんも今日をきっかけに信じませんか。これを信じていれば、苦しい間は耐えるんです。生きようとしているんですから。だけど、死ぬことを恐がらなくていいんです。死ぬときは、本当に気持ちのいい、うっとりするようなところへ行けるようにできているんです。皆さんも臨終を迎えるときに「苦しい、苦しい…。だけど、あのとき丸顔に眼鏡の人が言っていた。苦しいうちは耐えるんだ。死ぬことを恐がらなくていい。死ぬときはうっとりするような気分で逝ける」。それだけが救いになる日が今世紀中にきます（笑）。でも耳はいい加減です。フサは昼間一人ですから、せめてテレビでもと思ってつけておくんですが、そんなものは子守歌です。フサは昼間から眠るようになりました。全く運動しませんから、体が拘縮するんです。筋肉が縮む、歯茎が縮む、入れ歯が合わなくなる。そうなると、刻みにおかゆしか食べられません。食べさせると、歯茎だけでもぐもぐ、もぐもぐ、ごくん。やがて口数が減るんです。昼間から眠るんですから頭が衰えるんですね。何を言っても頷くだけになりました。その状態で３年寝るんですよ。長かったですね。一杯食べさせるでしょ。「うまいか」って言うと、頷くんです。必ず頷くから、ある時いたずら心で、「本当はうまくないのか」と言うと頷きます。うまくてもうまくなくても、頷くだけの人間になってしまったんです。

誕生日。マグロの刺身が好きな人でしたので、マグロの刺身を刻んで、「ばあちゃん、マグロだよ」って口に入れてやると、もぐもぐ、もぐもぐしているんですが、べっと出すんです。出されるとムカッときますね。「ばあちゃん、マグロだよ」って言う声が大きいんです。大きな声を出してはいけませんよ。しかられると思うんですね。ウッと身を縮めたところへ、次のマグロがガバッと入ってくるでしょ。もぐもぐもぐもぐ…べっと出すんです。「ばあちゃん、誕生日のマグロだよ」って言う声が大きいでしょ？ウッと身を縮めたところへ、次のマグロがガバッと入ってくる。もぐもぐもぐもぐ…べっと出すんです。「どうして出すんよ、ばあちゃん」。分かりますか？皆さん。私は、あんなに好きなマグロをどうして出すのか分かりませんでした。こんな仕事をするようになってからやってみました。皆さんも今日の帰りに刺身を買って帰ってください。家族に刻んでもらって自分は目を閉じて、口に入ってきた、醤油のついた、刻んだマグロを目を閉じて、醤油の味がなくなるまで歯茎のつもりで噛んでみてください。答えがでます。口に残るものはカスみたいなものですよ。刺身ほど、目をつぶると得体のしれない食べ物というものはありません。そんなことが私は分かりませんでした。今だったらこう言います。「ばあちゃん、川向こうに魚屋さんがあっただろう。大将は亡くなったけど、今は息子さんが後を継いでいてね。真っ赤なマグロの切り身があったんだよ。今日はおばあちゃんの誕生日だから、買ってきたんだよ。刻んであるけど、マグロだよ。さあ口開けて。マグロだよ」こうすればフサはマグロを食べたんでしょう。相手の立場に立つって、難しいことですね。フサが教えてくれました。

だけどフサはもっと大切なことを教えてくれました。大抵の講演会は、いい介護をするための話が多いですけれども、いい介護を受けるコツをフサが教えてくれました。それを特別にご披露しますので、参加しなかった人には秘密にしておいてください（笑）。フサはいつの間にか寝たきりになって３年寝たんです。これが長

かったんですね。経ってみたら３年でしたけれども、介護している最中は５年になるか、10年になるか分からないんです。出口の見えないトンネルです。それが辛いんです。ですから、私がもし寝たきりになるんだったら、今から決めています。介護する人に言おうと思っています。「すまんな、わし今日から３年寝るぞ」。予告をする。そうすると家族は、あと２年、あと１年、あと半年…。私が４年経っても生きていると、「じいちゃん、３年って言っていたけど、４年経つわよ。それもこれも私たちの介護がいいからよ」と、こうなるでしょ。私が２年で死ぬと、「じいちゃん、３年って言っていたけど、２年だったわよね、でも一生懸命介護したから悔いはないわ」と、こうなるわけです。予告をする。３年が妥当かなと思います（笑）。

もう一つは、もぐもぐもぐもぐ…ぺっと出されると憎たらしかったんです。だから、私は今から決めています。私が寝たきりになったら、誰かが私のためにこしらえて口に入れてくれた物は、どんなにまずくてももぐもぐもぐもぐ…ごっくん。飲み込んでやろうと思っています。いい介護を受けようと思ったら、寝ている者もそれぐらいの努力はせにゃあ(笑)。これがコツその２です。

コツその３は、フサはうなずくだけだったんですよ。あれが辛かったんです。報われたいと思っているわけじゃないですけれども、反応がないと疲れます。だから、私は寝たきりになったら、介護してくださる人に言葉を返そうと思っていますが、恐らくこんなにしゃべれません（笑)。こんなにしゃべったら変ですよ。「じいちゃん、ゆうべからずっとしゃべりっぱなしだけど、医者に見せたほうがいいわよね」と、こうなるでしょ(笑)。こんなにしゃべる能力も恐らく残っていませんから、必要最小限どれだけの言葉を知っていたらいい介護が受けられるかを考え抜いたんです。そしたら三つでした。たった三つ。それは、寝たきりになんかならなくったって、人間が生きていく基本でしたね。「ありがとう、すまないね、おいしいよ」です。「ありがとう、すまないね、おいしいよ」。この三つを、どんなにぼけても、うわ言のように繰り返していれば、まあまあの介護が受けられるのではないかと思いますが、ぼけてからは覚えられません。人の話が１時間半、きちんと聞ける能力が残っているうちに、癖にしてしまってください。この話が終わった直後から、「ありがとう、すまないね、おいしいよ」。癖にしてしまうと、オムツを換えてもらって、「おいしいよ」って言ったりしますけれども、言わないよりましですよ。フサはそれを言わないんです。

介護をする方が疲れました。気が急く時…読みたい本がある、見たいテレビがある、会いたい人がいる…信じてください、悪気はないんですよ。一杯食べさせて思わず言ったんです。「もういいだろ」。フサがうなずきますから、切り上げました。どうせ分かりゃしないんです。

今考えてみると、火曜日の夜っていうのが一番可愛そうでした。火曜日の夜７時半、私が一杯食べさせ終わるころに、大好きなテレビを毎週毎週やっていたんです。志村けんという人の顔を真っ白に塗った殿様、あれが好きでしてね（笑)、あれが始まるのに、もぐもぐもぐでしょ。「ばあちゃん、もういいだろ」って言うと、頷くから、晴れ晴れと介護を切り上げて、志村けんを見ていました。反応がないのをいいことに、いい加減な介護が始まったんです。

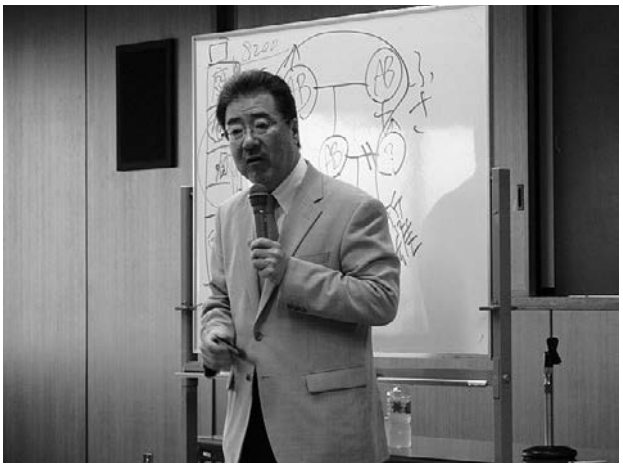
だけど、私の心にも優しい気持ちがよみがえる日があります。私がばあちゃん子だって分かりますか？ただいま！と哲雄少年が帰ってくると、トシコとゲンスケは印刷屋で働いています。おかえり！と迎えてくれるのはフサなんです。「くど」というのがありました。かまどのことです。二十代の大学生に、「くどって知っている？」って聞くと、「同じことを何度も言うことでしょ」。「違う、かまどのことだよ」（笑)。かまどの前に切り株が二つあって、フサがプウッと、火吹き竹でご飯を炊いていました。その横が私の切り株です。昔の子は学校から帰って来ると、ランドセルなんか放り投げて、ただいまよりも先に切り株にちょこんと座って、「ばあちゃ

ん、なんかない？」て言うんです。ばあちゃんは立ち上がって長い菜ばしで、大きな真鍮のなべに塩ゆでしてあるジャガイモをプツプツプツとヌウッと差し出してくれる。このジャガイモ３兄弟が私のおやつなんです。かまどの火を見ながら、ハフハフっとかじりながら、一日あった学校の出来事を全部しゃべるんです。フサは火吹き竹の手を休めて聞いてくれるんです。「そうか、哲雄、いじめられたか、可愛そうに、よう我慢したな。おまえの母親のトシコ、あれは昔な、よう泣かされて帰ってきたぞ」と、全部ここで聞いてくれるんです。それがカウンセリングでした。

私は、長いこと「老いの風景」という小説を書いているうちに、気がついたことがあります。私たちの心には川が流れています。その川には感情というものが流れてくるんです。流れてきた感情を、たっぷりと味わうのが人生なんです。たくさん味わった人の人生が豊かなんです。大抵は悲しいことに嬉しいことが寄り添ったりしています。ああ、悲しかったけど、あのときに思いがけない人にあんなことを言ってもらって嬉しかったなあ…と味わって、流れていくんです。ところが川がせき止められると、感情が淀んで腐るんです。感情が腐ると恐ろしいですよ。「私なんか一人ぼっちだ。誰も大切に思ってくれない。そうだ、七輪を買ってきて、車の中で火を起こそう」。自ら命を断つ人が年間に三万人です。心の川はサラリサラリと流れていなければなりません。流す方法はたった一つです。一人でいいから、真剣に話しを聞いてくれる人が要るんです。「それは大変だったね」って言われると、解決しないまま流れていくんです。「それはよかったわねえ」って言われると、本当にいいことが味わえて流れていくんです。人間には感情を流したいという本能があるんです。嬉しいことも悲しいことも、誰かに言わなきゃいられないのです。

私の心の川を流してくれたのがフサでした。

私の作った標語があります。**「困ったときに心が通う。もっと不便を大切に」**。困ったときや不便なときに助け合ったり寄り添ったりして、ああ、人間っていいなあ…と思うんですよ。ところが、文明は困ったことや不便なことを奪います。母親が台所から２階の娘に、「ご飯ができたわよ」、ピッと、メールを送る。２階の娘が「私ダイエット」、ピッと、とメールを返すんです。心が通うわけがないですよね。不便だと心が通います。郡上八幡は不便でした。掘り炬燵。炭や煉炭で暖をとってあるんです。冬なんか寒いので、潜っていくと一酸化炭素中毒で子どもが死ぬんです。出てくると寒いでしょ。潜っていくと息苦しいんです。出てくると寒いでしょ。潜っていくと寒いんです。こんなことを一晩中やっていたら、筋肉が付くだけで眠れないでしょ。隣で寝ているフサに、「ばあちゃん、寒い」って言うと、フサがふっと布団を持ち上げてくれる。私が入り込むと、フサが太ももで私をはさんでくれるんですよ。人肌っていいですよ。ぬくぬくしてくると、ばあちゃんにお話をせがむんです。「ばあちゃん、お話ししてよ」。ばあちゃんは畑仕事と家事でくたくたですから、話をはしょるんですね。あのはしょり方は許されません。今でも覚えています。「どんぶらこ、どんぶらこと桃が流れてきてなあ、流れていってしまったんじゃ」（笑）。桃がいってしまう。「ばあちゃん、桃が」と言うと、ばあちゃんは続きををしゃべる能力は残っていませんから話が変わるんです。「きらりと光る竹があったのでなあ、じいちゃんが半分に切ると、中のかぐや姫も半分に切れたんじゃ」（笑）。赤い血がドバッ。かわいそうなのは浦島太郎です。大枚



のおカネをはたいて助けたカメが執念深くて、大きなカメに成長して、浦島を海に引きずり込んだまま、二度と戻ってきません。「ばあちゃん、浦島が」と言ったら、ばあちゃんは意識もうろうで、とうとう真実を語りました。「哲雄、人間はな、海の底では生きられん」（笑）。

フサのほら穴のような口を見ていると、この人に色んなことを聞いてもらった、色んなことを話してもらったと暖かい気持ちになって、「おかわり要るだろ」。頷く。どうせ分かりゃしないのです。

そんなある日、ふさのいとこが４人見舞いに来ました。帰りに取り囲んでね、「フサよお、わしらも年やで、もう来れんかもしれんけど、まめでやれよ」。あほかと思いました。まめじゃないし、フサは誰が来て、自分がどういう状況で、今日が何曜日か、何にも分からないんだよって心の中で思ったとたんに、フサがしゃべったんです。２年近く聞いたことのない懐かしい声を張り上げて、「みんな、遠いとこわざわざすまなんだのう」。背筋がさあっと寒くなりました。フサはなにもかも分かってたんです。分かっていて口をつぐんでいたんです。

いつから口をつぐんだか振り返ると、おむつをしたころからなんです。これで食べることも寝返りも、とうとう排泄まで人の世話になる。ようし、わしの人生、あと何カ月何年残されてるかしらんが、もうわがままは言わんぞ。運命は全部、頷いて頷いて受け手で生きてやろうと、指がぶらぶらになってもくっつけてしまう明治の女が、決意をしたんですよ。おむつにはそういう力があるんですね。フサは懐かしいいとこの声に、思わず誓いを忘れて「すまなんだのう」と声を張り上げたのを恥じるように、それからしばらくして、この世を去ります。死ぬときは幸せだったと私は信じています。

高山市に転勤になりましてね、土曜日になると郡上八幡を見舞って、日曜の夜高山市へもどって行く、日曜日の夜です。焼肉をしました。トシコが一杯食べさせました。俺が代わるよって言って、私が代わりました。介護ってね、毎日だと疲れるんです。特に寝不足がいけませんね。疲れると、どんなに愛する人でも呪うんですよ。私、大切なフサに死んでほしいなんて、一度も思ったことないですよ。でもね、いつまで生きるんだろうと思ったことが何度もあるんですよね。ところが１週間に一度になったら、やさしい気持ちになりました。「ばあちゃん、おかわりいるだろ？」。頷く。おかわり、おかわり、てんこ盛り。張り切ってフサに口に入れてやりましたけど、みなさん、てんこもりはだめです。もぐもぐもぐもぐしてましたけど、飲み込もうとして、ウッと喉につまらせました。抱き起こして「ばあちゃん、大丈夫か、大丈夫か」と背中を叩きました。フサは鼻の頭まで真っ赤になって目を開けました。手術した方の目。山吹色の目やにが糸を引いています。その裏側から、澄んだきれいな瞳が私を見つめました。視力はありません。だけど見つめたという実感があります。背中を叩き続けました。家族はフサを取り囲みました。フサは見えない両眼を大きく見開いて、たった一つの家族をぐるっと見回す頃には、首筋まで真っ赤でした。背中を叩き続けた甲斐があって、すっと白い顔色に変わりました。危なかった、危なかった、年を取ると飲み込む力が弱るから、スプーンを重ねるごとに、量を減らさなきゃいけないのに、おれ、張り切っててんこ盛り。危なかったなあ。でもよかったねって、焼肉の続きをしたのです。すっかり焼肉済ませて、わたしがフサの耳元で「ばあちゃん、また土曜日来るからね」と言ったのですが、フサが頷きません。「おばあちゃん？」フサが揺れるのです。胸騒ぎですよ。「あれ？まさか、いやそんなはずはない。おばあちゃん？おばあちゃん？」生きてるか死んでるか分からないのです。確かめる方法を一つだけ知っていました。髪の毛を１本ぷつっと抜いて、フサの鼻先へもっていきました。これがそよりとでもそよげば、かすかに息をしています。ところがそれが、そよがないのです。「おふくろ、おばあちゃん変だよ」トシコが、「おばあちゃん、おばあちゃん、おばあちゃん」遅くなって生んでく

れたただ一人の母親ですよ。トシコはフサの薄い胸に耳を当てました。鼓動が感じられません。枯れ枝のような手首を探るのですが、脈が感じられません。小説ならここで違う台詞が出ますが、現実はもっと迫力がありますね。生きててほしいんです。トシコが明るい顔をあげて、「哲雄、この人は昔から脈の細い人なんや。こんなことでは分からんのやぞ」と、もう一度耳を当てたとたんに、文楽人形のように眉を吊り上げて、「医者や、哲雄、医者や！」私は八幡病院に電話しました。先生が駆けつけて、ペンライトで目を照らして、聴診器当てて、脈をとって、ふさの臨終を告げました。フサは私の腕の中で真っ赤になって家族を見渡して、すっと顔色が白くなった瞬間に天国へ旅立ったんですね。そんなこと知らずに焼肉ですよ。それが悲しかったんです。フサは、家族の誰一人にも、死んだことを気付かれずに、天国へ続く階段をたった一人でとことことことこ昇っていったんです。目が不自由ですから、どんなに心細かったかと思うと、もう悲しくて悲しくて悲しくて…。あんな悲しみは二度と味わいたくないですが、頭が悲しくないんですよ。下っ腹にこんな塊ができるんです。これが大きくなりながら上がってくるんです。みぞおちに達するとワァッと涙になるのでしょうが、私の悲しみが涙になるより先にトシコが取り乱しました。父親代わりの気丈な母親のあんな姿を見たのは、初めてでした。張り合いないっていう方言があるんです。生きている張り合いがない。悲しくてつらくて残念で腹立たしくて、もうどうしようもないという嘆き言葉です。「張り合いない、張り合いない。これでのうなっては張り合いない」。トシコが泣き狂うんです。３年介護したトシコが、なんと言って泣き狂ってるかに驚きました。「張り合いない、先生。私この人にまだ何にもしてやっとらん。この人にまんだせんならんことがいっぱい残っとる、先生。心臓マッサージしておくれ。心臓マッサージしたら、おばあちゃん生き返らんかな」先生が立ち上がろうとすると、トシコは白衣を引っ張って、「おばあちゃんまんだぬくといがな。心臓マッサージをしておくれよ。連れていきたいところがあるんや」

私は悲しみに取り残されました。半分悲しいのに半分は冷静です。冷静な私が何を感じたかを覚えています。フサが私に言うのです。「哲雄、おまえはゲンスケが死ぬ死ぬ死ぬと言い暮らすから、死ぬことを怖がり過ぎてやしないか。人間はオギャアと生まれてきたら、必ず死ぬから、そう怖がるな、怯えるな。ゆったりと今日一日を味わってごらん。その代わり突然死ぬんじゃないぞ。人は一日一日ゆっくりゆっくり死んでいく。お前は今日一日を死ぬんだから、今日という日を大切にしなさい。今日出会う人を大切にしなさい。私がお前にしてやれる最後の教育。死ぬなんてことはな、ちょっとがまんすれば、溝をひとまたぎするようにあの世にいける。お前の腕の中で死んで見せてやるから、ようく見ておけ！」と言って、真っ赤になっていた気がします。

その亡骸に取りすがって泣き叫ぶトシコの震える背中が私に言うのです。「いいか哲雄、どんなに慕ってくれても、順番どおりにいけば親が先に死ぬぞ。親が死んだら後悔しなさい。なりふり構わずこんなふうに泣きなさい」と言って、泣いていた気がします。

火葬場で佇む私たちのところへ、火葬場の職員が来て、関西弁で言いました。「おばあちゃん、天国行かはりましたよ。私長いことこの仕事してますが、あないに白い骨見たん、初めてですわ」と言われて骨あげに行くと、フサは真っ白でした。ひろうところがないぐらい、真っ白な骨になっていました。あの白さで、私は、ああ、天国へいったんだと信じることができましたが、今振り返ると、見ず知らずの火葬場の職員の一言に救われているんです。

人は言葉によって傷つき、言葉で救われます。今日は特に精神保健福祉の関係の方が集まっています。人の心を扱う仕事です。どうか、悲嘆にくれる人の耳元で、何かささやく機会があったら、その人が救われる一言を探してあげて下さい。介護というのは、目の前の人のお世話を

することですが、それと同時に自分の心にどれくらいの愛が棲んでるか試されるんだと思います。私は小さな愛でした。もういいだろう、もういいだろ…。

私の介護体験が皆さんのこれからを考える上で少しでも参考になれば嬉しく思います。

■ 随　想 ■

余　命

前協会長・名古屋大学 名誉教授
名古屋第一赤十字病院 心療相談センター長　**太　田　龍　朗**

この６月をもって愛知県精神保健福祉協会の会長を退任した。名古屋大学医学部精神医学講座の第５代教授を20年間務められたのち、当時藤田保健衛生大学医学部精神神経科学講座の教授でおられた笠原嘉先生からそのお役目を引き継いだものの、目新しい何かをとり入れたといったこともなく、従来を踏襲するに留まった10年間であったが、その間大過なく過ごすことが出来たのは、各方面の御支援ご協力の賜物とこの場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

ところで、小生が医師としての駆け出しの頃を過ごした名古屋大学精神科は、主任教授は第４代の堀要先生という方で、わが国児童精神医学の草分け的存在として知られた人であった。門下からはわが国で最初の自閉症児（広汎性発達障害）の報告が出るなど、児童精神医学・医療と児童福祉に大きな足跡を残された。今日でこそ全国の多くの大学に児童精神科の講座や診療部門が設置されているが、当時は皆無といってよく、身体病ではない幼児や子供の診察が小児科以外で行われたのは極めて珍しく、初診時に幼児をパンツひとつにして必ずその中を覗き、発達の状態を確かめられる独特の診察場面を今でも鮮明に想い出す。この児童精神科の歴史と実績が評価されたのだと思うが、全国に先がけて「親と子どもの心療部」が母校に設置されたのは、笠原先生から会長を引継いだ丁度その頃のことである。当時、教室の責任ある立場にあったこともあって、恩師の熱い思いが実現した時の喜びはひとしおであった。

さて、この堀先生であるが、晩年になって「私の余命○○年」というようなことを言われるようになった。おそらく、当時の平均寿命から逆算して残りの人生を算出されてのことではないかと推測するが、先生は、この「余命」をかなり残して、今の時代からみれば“早生”されてしまった。よわいを重ねて老後を意識されたのかどうか分からないが、自らを振りかえり今周囲に何をなすべきかを考えられてのことかと思うが、古稀を迎えられたこの頃に“後になって孫達に読んでもらいたい”との趣旨をはしがきに記したうえで、趣味にされていた俳句の句集「こしかた」を発刊されている。前ばかりを向いて後など振り返ることなどこれっぽっちもなかった当時のわが身にはこのような言辞は奇異にさえ映ったが、いま共働きの娘夫婦の孫達を“ジジ･ババ”として面倒をみるようになってみると、先生の当時の心境が実によく分かるようになった。

先日の新聞報道によると、100才以上の人が全国で５万人を超えたという。100歳を迎えたということで珍しがられ、地方自治体の首長がお祝いを持って自宅を訪問する写真が新聞に載るようになってさほど経っていないのに、驚くべき高齢社会の拡がりである。驚いたと言えば、もうひとつ最近の体験を述べておきたい。筆者の母校の高校は信州にあるが、３年後に創立120周年を迎えることになっている。卒業生は

この地方だけでもかなりの数にのぼっているが、たまたま同窓会の東海支部長をこの４月から仰せつかったので、卒業後一度も出席したことがなかった地元信州で開催される総会に初めて出席した。型通りの議事が終って全国から参集した卒業生と現役教職員あわせて数百名による懇親会がはじまった。その冒頭に乾杯の音頭をする人の紹介があって場内がどよめいた。1912（明治 45）年生れ、昭和１桁台の卒業で、今から 40 年前にこの世を去った親父と同年齢の丁度 100 歳になった小柄な大先輩が、誰の介助を受けることもなく登壇し、在学当時の思い出話のショートスピーチのあと、凛とした声で乾杯の発声を済ませ矍鑠として降壇する姿を目の当たりにして、“ウーン、時代もここまで来たか”と妙な驚きと感動を覚えた。

現在総合病院に嘱託常勤医として勤務し、若い研修医や中堅クラスの若手といっしょになって患者さんの診療に当っているが、日々問題にぶつかっては新しい発見があって、ある意味充実した仕事を続けることが出来ていて嬉しい。しかし一方で数年前までは後を振り返るようなことはほとんどない、あるいはその余裕がないと言った方が適当かも知れないような毎日であったが、このところ堀先生の「余命何年」が時々脳裡をかすめるようになった。かつて医学生に向って「この医師不足の時代、体が許す限り 85 歳迄働いて欲しい」と言って来たが、かの 100 歳の大先輩に出会ったことによってこの期待が絵空事ではなくなる日が来るかも知れないと思うようになった。余命を逆算することは出来ないが、「余生を送る」といった消極的なものではなく、高齢者が公的と私的とを問わず、社会からその役割を求められ、本人が生き甲斐を感じることのできる社会環境を是非とも早急に準備しなくてはと強く思えてならない。

■ トピックス ■

心神喪失者等医療観察法について

愛知県精神保健福祉協会 副会長
独立行政法人国立病院機構東尾張病院 院長 **舟 橋 龍 秀**

刑法第 39 条は次のように書かれている。「心神喪失者の行為は、罰しない。心神耗弱者の行為は、その刑を減軽する」。心神喪失とは、精神の障害により、物事の善悪を判断する能力とその能力に従って自分の行動をコントロールする能力がともに失われている状態であり、心神耗弱とは、それらの能力が著しく減退している状態を言う。従って、ある人が、例えば、幻覚や妄想といった精神病症状に直接影響されて他害行為を犯したとすれば、その行為に対してその人に責任を負わせること、すなわち刑罰を与えることができない場合がある。これが、刑法第 39 条が定めていることである。

さて、そうした場合、その行為者をどう処遇したらよいか。従来、我が国では、精神保健福祉法第 25 条の規定に従って、検察官による通報がなされ、精神保健指定医による措置鑑定が行われ、自傷他害の恐れがあると判断されれば、都道府県知事の命令による措置入院となっていた。ところが、この制度については、対象者に必要な医療に必ずしも繋がらない、措置入院退院後の医療の継続性が担保されていない、医療の質や治療のプロセスに医療機関によるばらつきがあるなどの問題点が指摘されていた。そこで、とくに殺人等の重大な他害行為を犯したが心神喪失や心神耗弱状態のために刑の執行がなされなかった対象者に対して、こうした問題点を是正し均質で手厚い医療を提供するために、平成

15年7月に「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察に関する法律」（心神喪失者等医療観察法）が成立し、平成17年7月から施行された。

この法律の第1条には、法律の目的が次のように書かれている。すなわち、「この法律は、心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者に対し、その適切な処遇を決定するための手続等を定めることにより、継続的かつ適切な医療並びにその確保のために必要な観察及び指導を行うことによって、その病状の改善及びこれに伴う同様の行為の再発の防止を図り、もってその社会復帰を促進することを目的とする」。分かりにくい文章であるが、この法律の最大の目的は、円滑な社会復帰を可能にすることである。そのためにこの法律は従来とは異なるシステムを構築している。まず、司法と医療、行政との協働である。この法律に基づく医療システムへの入口と出口は裁判所に設置された裁判官と精神科医の合議体に判断に委ねられている。その判断に際して、鑑定が実施される。これは刑事責任能力鑑定とは異なり、治療反応性や社会復帰要因などにより医療の必要性が判定される。次に、治療は専門の施設において共通の治療プログラムに基づいた質の高い医療が提供される。入院治療が必要と判断されると、あらかじめ厚生労働大臣によって指定された施設の病棟に入院する。そこはハード面でもソフト面でも一般の精神病棟に比較して数段優れている。そこでは、医師、看護師、心理士、作業療法士、精神保健福祉士が、個々の対象者ごとに1つのチームを作り、それぞれの専門性に基づいたチーム医療を展開し、原則として18ヶ月以内の退院を目指している。平成23年12月現在で指定入院医療機関は、全国で28ヶ所、病床数は666床である。東海北陸地方では、いずれも国立病院機構の東尾張病院（名古屋市）、榊原病院（三重県）、北陸病院（富山県）の3施設に入院病棟が設置されている。

さらに、退院後の通院を確保するシステムが作られていることである。法務省が管轄する保護観察所に所属する社会復帰調整官の見守りと支援を得て、あらかじめ厚生労働大臣によって指定された通院医療機関に少なくとも3年間は通院することが義務付けられている。こうして、治療中断による再発を防止しようとしている。最後に、この法律の付則には、この法律の医療システムをモデルとして精神医療全体の水準の向上を努力目標として挙げている。これが絵に描いた餅にならないよう、われわれ精神医療に従事する者は一般市民に精神障害を正しく理解していただくために啓蒙に努めなければならない。

■ 団体紹介 ■

愛知県精神保健福祉士協会

会長　梅　村　仁　志

愛知県精神保健福祉士協会は精神保健福祉士（以下PSW）の専門職団体として平成1999年に結成されました。精神保健福祉士は1997年に誕生した精神保健福祉領域のソーシャルワーカーの国家資格で、それ以前は精神科ソーシャルワーカーとして1950年代より精神科医療機関を中心に医療チームの一員として、精神障害者の援助を担ってきました。

私達PSWは「社会福祉学を基盤として精神障害者の社会的復権と福祉の為に専門的・社会的活動を進める」という基本方針を持ち、相談援助を中心に医療の利用に関する支援、地域移

行支援、就労支援、権利擁護活動、普及啓発活動などの支援で精神障害があってもその人らしく生活できるための援助を行っています。

現在約 500 名の会員が医療機関、地域の生活支援施設（自立支援法の施設）保健所や市役所の行政機関、司法の施設（保護観察所や矯正施設）ハローワーク等で援助活動を行っています。

愛知県協会として会員の援助活動を支える為、全国協会（社団法人日本精神保健福祉士協会）に加入し生涯研修、個別研修などにより個々の精神保健福祉士としての支援技術の向上を図っています。

又、県内を７ブロックに分けて、地域ニーズに基づく研修や事例点検を行い、さらに会員のニーズを中心に研修を行っています。

何処の精神保健福祉士であっても、当事者、家族に必要な支援ができる為の質の担保が協会に課せられています。

もう一つ県協会としての役割に、地域のニーズの活動があります。自殺予防の心の健康相談、ひきこもりメール相談、ハローワークにおける就労サポーターなどの活動を地域や行政と連携をとり進めています。

理事会は、月１回行われ、各ブロックから選ばれた理事が会員のニーズを集約して、必要な研修などの企画を行い、協会活動報告予定などはホームページや会報により会員に伝えられています。

愛知県協会として更に精神障害者や家族に必要とされ、地域に認められる精神保健福祉士の団体として更に努力を重ねながら活動をしていきたいと考えています。

精神保健福祉基金貸し付け制度のご案内

当協会では、精神障害者の社会復帰及びその自立と社会経済活動への参加の促進を図るために、「愛知県精神保健福祉協会精神保健福祉基金」を設置し、精神障害者を対象とする障害福祉サービス事業所等を運営する者に対して、必要な資金を無利子で貸し付けています。

＊貸付の対象者…主として精神障害者を対象とするグループホーム、ケアホームまたは小規模作業所等を運営する者

＊貸付の種類…①運営資金―施設の運営に要する費用
②整備資金―施設の創設、改造、修理等に要する費用

＊貸　付　額…１口 10 万円で、限度額は 15 口（150 万円）まで

＊貸付利子…無利子

＊償還方法…１年据え置きで、以後４年以内に一時償還または分割償還

＊受付方法…毎年８月末日までに協議書を提出（平成 24 年度は終了しました）

お問合せは精神保健福祉協会事務局へ

■ 平成 24 年度（第 24 回）「定期総会」報告 ■

平成24年度（第24回）定期総会が６月21日（木）に開催されました。協会諸事業、平成23年度決算報告及び平成24年度予算（案）について協議され、それぞれ承認されました。

なお、新役員は次のように承認されました。

顧　問

太田　龍朗　名古屋大学名誉教授
野村　道朗　愛知県教育委員会教育長
柵木　充明　愛知県医師会長

会　長

尾崎　紀夫　名古屋大学教授

副会長

舟橋　龍秀　東尾張病院長

常務理事

明智　龍男　名古屋市立大学教授
子安　春樹　愛知県精神保健福祉センター所長
津下　一代　愛知県健康づくり振興事業団
　　健康科学総合センター長
西山　　朗　愛知県医師会理事

理　事

川口　悦子　愛知県看護協会常務理事
木落　勇三　日本精神科看護技術協会愛知県支部長
粉川　　進　愛知県立城山病院院長職務代理者副院長
小山　和己　名古屋少年鑑別所長
近藤　三男　愛知精神神経科診療所協会長
高橋　蔵人　愛知県臨床心理士会常任理事
中島　幸一　愛知県健康福祉部こころの健康推進室長
船戸　　淳　名古屋市健康福祉局生活福祉部長
松原　光彦　愛知県県民生活部学事振興課私学振興室長
村瀬　誠一　愛知県県民生活部社会活動推進課長
山田　久子　愛知県地域婦人団体連絡協議会長

監　事

三宅　　眞　名古屋市健康福祉局障害福祉部主幹

平成 23 年度収支決算

（単位千円）

収入の部		支出の部	
会　　費	1,265	人件費	751
県委託料	200	事務費	260
市委託料	100	事業費	720
繰越金	1,189	繰越金	1,024
雑収入	1	予備費	0
計	2,755	計	2,755

平成 24 年度収支予算

（単位千円）

収入の部		支出の部		
会　　費	1,275	一般管理費	人件費	802
県委託料	200		事務費	500
市委託料	100			
繰越金	1,024	事業費		1,175
雑収入	1	予備費		123
計	2,600	計		2,600

編集後記

やっと暑い夏が終わったと思っていたら、朝晩の涼しさで少し風邪気味です。

皆様の体調はいかがですか。

６月の総会で、新会長が決まりました。この号では、新旧の会長、また新しい副会長にも原稿をお願いし、総会記念講演の内容と共に、幅広い話題を載せることが出来ました。

今後も、様々な話題を取り上げていきたいと思います。是非会員の皆様からもご意見をお寄せください。　〈事務局〉

会員募集のお知らせ

当協会では、広く会員を募集しています。
年会費：個人会員（ 1,000円）
　　団体会員（15,000円）
　　賛助会員（50,000円）
入会のお問合せは事務局までお願いします。

事務局　〒460-0001
名古屋市中区三の丸３－２－１
愛知県東大手庁舎
愛知県精神保健福祉協会
TEL　052 － 962 － 5377（内 550）
FAX　052 － 962 － 5375